

原典で読む

外国人が見た日本

高橋知明

瀬田玉川神社禰宜



第十五回 V・F・アルミニオン 『イタリア使節の幕末見聞記』（後編）

「われわれからの贈り物は、日本の役人たちを驚かせた。率直に言つて、このことは彼らが非常に頭のよいことと、物を見る目の高いことの証拠である」

西洋諸国において、遅れて来日したアルミニオンですが、イタリア使節として幕府との通商交渉のため、江戸城内に入ることでできた数少ない外国人の一人となります。

城内の様子について、

「城館の各室はあらゆる面で質素であり、東洋諸国の王宮の普通の豪華さとはいちじるしい対照をなしていた。しかし、襖や屏風は極めて優雅なもので、半透明な和紙に見事な絵が描かれていた。

畳もはなはだ上等なものだった。天井を支える柱には、精巧な技術と高尚な趣向が見てとれた」

と記し、日本の最高権力者の住まいが、諸外国のように華美な派手さはなく、されど質素な中に美しさが存在することに感銘しています。

一方、庶民はどんな暮らしぶりだったのでしょうか。

「日本人の質素な生活は文字どおりスパルタ的で、家の四方の壁のほかにほ

とんど何も無い。椅子、ソファ、ベッド、小卓などは知られてさえいない」

庶民の生活に至っては、かつてのローマ帝国の中心であったイタリア人をして「スパルタ的」と評するところを見ると、非常に質素であつたことがわかります。

また、日本人は清潔であつた様子も描かれています。

「日本人は入り口で履物を脱ぎ、足袋、つまり木綿のサンダルのようなもので屋内に入る。……汚れた足で他人の家に入ることは、非常に不作法であり、躰がなっていないとされる。事実、貧しい人々の家でも、室内の敷物は清潔である」

家屋は常に清潔であり、また清潔であるが故の日本人の習慣にも触れていきます。

「日本人は洩をかむにも、ハンカチでなく、紙を使う。そのためには、特別に柔らかい紙が好まれる。誰もが懐中に、こういう紙を何枚か持っていて、一度使えば、捨ててしまう」

西洋人はハンカチをポケットから何度も取り出して洩をかむことがあることに對して、日本人が現代も変わらず紙で洩をかんで捨てる習慣が残っているのは興味深いですね。

彼は、日本人をとて好意的に見てい



ますが、その性格や特徴について、日本人は物事に対する好奇心が強いことを紹介しています。

とある村では、

「村人たちの好奇心を何よりもそそいだのは、われわれの服装、われわれの身なりだった。この村では、一人のヨーロッパ人女性が、うるさいくらいに称賛の的になっていた。彼女の庭の柵の際には、物見高い人々の群れが一日中ひしめて、彼女の姿に見入っていた。丸く広がったクリノリンのスカート、髪の毛の結い方、靴などについて、人々があれこれと話し合っているのがはっきりと見て取れた」

また、幕府の役人についても、

「われわれからの贈り物は、日本の役人たちが驚かせた。率直に言って、このことは彼らが非常に頭のよいことと、物を見る目の高いことの証拠である。彼らがとりわけ評価したのは、モザイク、写真、兵器類であった。物理学の器具も若干あって、その中のマイクロメーターはとくに塩田(※人名)に贈った。この青年は、この器具の原理もかなりよく理解しているらしかった」

と、紹介しており、後の時代に『西洋かぶれ』という言葉ができるほど、物事に対する好奇心と探究心を丸出しにする日本人の特徴を良く捉えています。



ところでニコライの時に触れましたが、西洋諸国は大航海時代以降、非西洋人は劣等人間として支配されるべきとして、あらゆる数々の許されざる悪行を働きました。

イタリアに先んじて来日した西洋諸国は武力を以て傲慢無礼な態度でやって来たのに対し、彼はそうではなく、互いの文化の違いを尊重していた人物でした。

「日本人が同輩に挨拶をする時には両手を膝の辺りに置き、頭を胸まで下げるのであり、目上の者に対しては、両手をついてひれ伏すのである。……こういう挨拶によって、目上と目下の区別がなされ、同輩間の敬意と友情が保たれるのだからである。……敬意の表明や礼儀に関して自己の流儀をまず改めなければならぬのは、われわれのほうであったことを、ここで指摘しておこう」

アルミニオンのこうした姿勢について翻訳者の大久保昭男氏は、イタリアが長い年月にわたり、周辺の西洋諸国の支配下に置かれた歴史に鑑み、

「支配と被支配、土地を奪う者と奪われる者の心情、痛みを彼が理解していなかったはずはない」

と解説しています。彼は幕府と互いの立場を尊重した通商交渉をし、ついには

幕府の役人にこう言わしめました。

「貴殿は、わが国の置かれている困難な状況をよく認識せられ、われわれの譲与しうる以上のことは要求されなかった。われわれは、これを大いに多とするものである。貴殿の誠意ある態度は、今後、両国間にはつねに和解と協調の關係のありうることの保証となるものである」

高圧的な西洋人と違い、公正かつ客観的に日本を観察したアルミニオン。本書の最後に彼は日本人の資質について、昔の宣教師らの書き残したものがもっとも確かであるとして、ある神父の言葉を引用しています。

「シャルヴオア神父の述べるところによれば、日本人は率直、真率かつ誠実であり、終生変わらぬ友である。彼らは富を軽蔑し、商業を賤業と見なすほどである。そして、真理を愛し、それを知った時には公言するのを恐れない。悪口、虚言、ごく些細な盗みも、彼らにとつては極めていまわしく、死に値することである。日本人は自制心が強く、他の国民のようにすぐに興奮に駆られて激怒するということがない。しかしまた、自尊心が強く、侮辱されたりすると、必ず復讐しようとする。彼らが冷然たる態度を示す時にはもつとも恐れなければならぬことがしばしばである」と。